

佳作賞

「空のあわいに」

「ココロ」不定期号

水無月うらら氏

水無月うらら（みなづき・うらら）

一九八四年十二月十三日、大阪府生まれ。

二〇〇七年、龍谷大学文学部日本語日本文学科卒業。

二〇〇八年、大阪文学学校入学。二〇一四年まで在籍。同年、同人誌『星座盤』参加。八号掲載作品「きみから見える世界」が『文學界』二〇一五年十一月号に掲載される。

二〇一七年、同人誌『mon』十号にゲスト掲載した作品「君は檸檬が読めない」が『季刊文科』七十二号に掲載される。

「空のあわいに」

鳥飼修斗は二十六歳、入社四年目の建築部営業。ルックスのよさを買われ、同じ営業で先輩の澤本には取引先の女性役職者を「落とす」ためによく同行させられている。十一月、商談が成功に終わったある夜、澤本に請われて鳥飼は交際して四年弱になる、有川真緒の写真を見せる。妻子持ちの澤本には若くて美人の彼女を羨ましがられ、結婚を考えていないのかと訊かれるが、鳥飼はその問いを制す。いまの彼にとって、それは耳にしたくない言葉だった。その帰り道、鳥飼は自宅の近所の草原で人影を見、そこで鈴のような音を聴く。

真緒は大学のサークルで知り合った一歳下の後輩だった。社会人になってからもふたりはまめに付き合っていたのだが、鳥飼の誕生日に真緒から高額な腕時計を贈られたのをきっかけに、彼女のそれまで控えられてきた結婚願望が突然目に見えて熱を帯びるようになる。結婚にいいイメージを持たず、これまでの関係を続けていきたいと思っていた鳥飼は困惑し、真緒との会話を徐々に避けるようになる。気になるといふほどではないが、鳥飼と澤本が密かに注目していたのが、産休で不在の事務員の田丸に代わって派遣でやってきた金古という地味な女性だった。勤務して二ヶ月の彼女は、仕事は早いがどこか愛想に欠けると職場で

は見なされていた。鳥飼も飼い猫の写真を見せて話しかけようとするが、うまくいかない。

週末、鳥飼は真緒とススキで有名な高原に出かける。自分の食べ物の好みを把握した弁当を作ってくれ、帰りには交替で車を運転するなど甲斐甲斐しい真緒。しかし鳥飼はそこでも結婚話を切りだされるのではないかと内心気が気でなく、話を逸らし続ける。その翌週も猫に会いたいといつて真緒は実家にやつてくるが、鳥飼よりも家族と仲良さげに話す。付き合いはじめた頃とお互いの見ているものが違ふと感じる鳥飼。寂しさなのか嫉妬なのか、こみあげる感情に耐え切れなくなった鳥飼は夕方、彼女を放つて近所のカフェへ逃げるように向かう。そこから見えたのは草原で鈴をつけた鳥を操る人の姿だった。いてもたってもいられず鳥飼は駆け寄っていく。そこにいたのは金古だった。自分の車まで鳥飼を案内し、照明の下でハリスホークと呼ばれるタカとその訓練内容を説明する金古は、職場とは違い生き生きとしていた。鳥飼は帰宅してから、近頃理解できなくなつた真緒ではなく金古を想像しながら自慰に耽る。

翌朝、鳥飼は前日訪れたカフェで金古がタカの訓練に来るのを待つ。はたして金古は現れた。今度はルーアと呼ばれる擬似の獲物を飛ばしてキャッチさせる訓練。タカの名は玄冬といい、この日が初陣の予定だという。金古に誘われ、鳥飼は狩りの現場へ共に乗りこむことになる。

晴れきつた空より曇り空が好きだという金古に思いを馳せながら川原での狩猟についていく鳥飼だったが、途中で真緒から「もう無理かも。いま電話をかけられないなら別れる」と連絡が入る。四年弱も付き合っていて吐きだされた言葉とは思えず立腹する鳥飼に対し、事情を知った金古は電話をかけるよう冷静に言い、相手の気持ちに惑わされず彼女に対する自分の気持ちをよく感じるようにと諭す。ひとりになった鳥飼は車から電話をかけ、真緒といたいたいままの気持ちを語るが、真緒の返事は「結婚できないなら腕時計代を返して別れてほしい」という実に打算的なものだった。あつけなく一方的に通話を切れキレる鳥飼を見て、車外の金古はなぜか微笑んでいた。帰りの車中、「ことが起こってしまった直後って、なんかほっとしませんか」と金古は話す。含みを感じた鳥飼は過去に何かあったのか訊こうとするが、するりと話をかわされる。

年末近くなり、産休をとっていた田丸は無事出産。鳥飼は澤本と相変わらず営業とその間の食事を共にしていた。職場で金古の表情が前より明るくなったのは、三回目の同行のときに玄冬が初めて狩りを成功させたからだと言葉は知っていた。マガモが命を奪われるシーンを目の当たりにしていたのだ。玄冬の成長を通じて、金古との心の距離は縮まったと彼には思っていた。恋愛とはいえないまでも。